

花間文字

泉鏡花

青空文庫

晩唐ばんたう一代いちだいの名家めいか、韓昌黎かんしやうれいに、一人いちにんの猶子いうし韓湘かんしやうあり。
 江淮かうくわいより迎へて昌黎しやうれい其の館そやかたやしなに養ひぬ。猶子いうし年少いとわかうして白哲はくせき、容姿ようあたか恰も婦人ふじんの如し。然も其の行しかひ放逸ほういつにして、聊いさゝかも學ぶまなことをせず。學院がくゐんに遣はして子弟していに件ともなはしむれば、愚ぐなるが故ゆゑに同窓どうさうに辱めらる。更に街西がいせいの僧院そうゐんを假かりて獨ひとり心こを静しずかに書しよを讀よましむるに、日ひを經ふること纔わづかじゆんに旬じゆんなるに、和をしや尚うのために其その狂暴きやうぼうを訴うつた。仍よつて速すみに館めしかへに召返めしかへし、座ざに引ひいて、昌黎しやうれいおもてたゞし。汝なんぢ見みずや、市肆ししの賤せん類み、朝暮てうぼの營いみに齷齪あくさくたるもの、尚なほ一事いちじの長ちやうずるあり、汝なんぢ學まなばずして何なにをかなすと、叔公ぢしきん大目玉おほめだまを食くらはず。韓湘かんしやう唯み

々ゝかしこまつめりて、爪つめを噛かむが如ごとくにして、ほつくと何か撮つまんで食くふ。
 其その状さま我が國くにに豌豆えんとうを噛かむに似にたり。昌しやう黎れい色いろを勵はげまして
 叱しかつて曰いはく、此かくの如ごときは、そもく如何いかなる事ことぞと、奪うばつて是これを
 見みれば、其その品しな有ある平糖へいたうの缺かけらの如ごとくにして、あらず、美うつくしき桃もの
 花はな片びらなり。掌たなを落そせば、ハラハラと膝ひざに散ちる。時ときや冬ふゆ、小春こはる日び
 の返かへり咲ざきにも怪あやし何處いづこにか取とり得えたる。昌しやう黎れい屹いきつと其その面おもてを睨にら
 まへてあり。韓かん湘しやう拜謝はいしやして曰いはく、小姪せうてつ此この藝げ當いたうござ候さふらふ。
 因よりて書しよを讀よまず又また學まなばざるにて候さふらふ。昌しやう黎れい信いまとせず、審つまびらかそ
 の仔しさい細なを詰なれば、韓かん湘しやう高たからかに歌うたつて曰いはく、青せい山ざん雲うん水すゐの
 窟くつ、此この地ち是これ我が家わが。子夜しや瓊けい液えきをそんし、寅いん晨しん降かう霞かうを咀くらふ。
 琴ことは碧へきぎ玉よくの調てうを弾たんじ、爐ろには白はく珠しゆの砂すなを煉ねる。寶はう鼎てい金きん虎こ

を存し、芝田白鴉を養ふ。一瓢に造化を藏し、三尺妖
 邪を斬り、逡巡の酒を造ることを解し、また能く頃刻の
 花を開かしむ。人ありて能く我に學ばば、同くともに仙葩を看ん
 と且つ歌ひ且つ花の微紅を嚙む。昌黎敢て信ぜず。韓湘
 又館階前の牡丹叢を指して曰く、今、根あるのみ。叔公
 もし花を欲せば、我乃開かしめん。青黄紅白、正暈倒暈、
 淺深の紅、唯公が命のまゝ也。昌黎其の放語を憎み、言ふ
 がまゝに其の術をなせよと言ふ。
 猶子先づ屏風を借り得て、庭に牡丹叢を蔽ひ、人の窺ふこ
 とを許さず。獨り其の中なかにあり。窠の四方を掘り、深さ其の根に
 及び、廣さ人を容れて坐す。唯紫粉と紅と白粉を齎らし入

ののみ。恁かくて旦あしたに暮くれに其その根ねを治をさむ。凡すべて一七日いちしちにち、術じゆ成なると
 稱しょうし、出いでて昌しやう黎れいに對たいして、はじめはて差さぢたる色いろあり。日いは
 恨うらむらくは節せつ遅おそきこと一ひと月つきなり、時とき既すでに冬ふゆにして我わが思おもふがまゝ
 ならずと。然しかれども花はな開ひらいて絢けん爛らんたり。昌しやう黎れい植ううる處ところ、牡ぼ
 丹たんもと紫むらさき、今いまは白はく紅こうにして縁ふちおのく緑みどりに、月げつ界かいの採さい虹こう玲れい
 瓏ろうとして薰かをる。尚なほ且かつ朶なびらごとに一いち聯れんの詩しあり。奇きなる哉かな、
 字じの色いろ分ぶん明みやうにして紫むらさきなり。瞳ひとみを定さだめてこれよを讀よめば——雲くもし
 横よ秦しん嶺りやう家か何なに在ある、雪ゆき擁らん藍らん關くわん馬ま不ふ前ぜん——昌し
 黎れい、時ときに其その意いの何なにたるを知らしず。既すでにして猶いうしうしが左さ道だうを喜こ
 ばず、教をしふべからずとして、江かう淮わいに追お還ひかす。
 未いまだ幾いく干くならざるに、昌しやう黎れい、朝てうに佛ぶつ骨こつの表へうを奉たてまつるに因よ

り、潮州てうしうに流ながされぬ。八千はつせんの途みち、道みちに日暮ひくれんとし偶雪たまゆき降ふる。

晦冥くわいめい陰いん慘さん、雲冷くちめたく、風寒かぜさむく、征衣せいゐ纒わづに黒くろくして髮かみ忽ちまち白しろし。

嶺みねあり、天てんを遮さへぎり、關せきあり、地ちを鎖とぎし、馬前うままず、——馬前うままず。

——孤影こえい雪ゆきに碎くだけて濛々もうくたる中なかに、唯見とみれば一簇いつそうの雲くもの霏ひ々

として薄うすく紅くわなるあり。風かぜに漂たがうて横よこざまに吹ふき到いたる。日ひは暮くれ

ぬ。豈あに夕陽せきやうの印影いんえいならんや。疑うたふらくは紅こう涙るみの雪ゆきを染そむる

事ことを。

袖そでを捲まいて面おもてを拂はらへば、遙はるかに其その雲くもの中なかに、韓かん湘しやうあり。唯た

一人ひとり、雪ゆきを冒をかして何處いづこよりともなく、やがて馬前ばぜんに來きたる。其その

蓑みの紛ふん々くとして桃花たうくわを點てんじ、微笑びせうして一いち揖いふす。叔公おぢさん其その後のち

はと。昌黎しやうれい、言ものいふこと能あたはず、涙なみだ先まづ下くだる。韓湘かんしやう曰いはく、

今、公、花間の文字を知れりや。昌黎默然たり。時に後
 れたる從者辛うじて到る。昌黎顧みて、詢うて曰く、此
 の地何處ぞ。藍關にて候。さては、高きは秦嶺也。昌黎
 嗟嘆すること久うして曰く、吾今にして仙葩を視たり。汝の
 ために彼の詩を全うせんと。韓文公が詩集のうちに、一封
 朝奏九重天——云々とあるもの則是。於茲手を取り
 て泣きぬ。韓湘慰めて曰く、愴むこと勿れ、吾知る、公恙あ
 らず、且つ久しからずして朝廷又公を用ふと。別るゝ時一掬
 の雪を取つて、昌黎に與へて曰く、此のもの能く潮州の瘴
 霧を消さん、叔公、御機嫌よう。昌黎馬上に是を受
 けて袖にすれば、其の雪香しく立處に花片となんぬとかや。

明治四十一年四月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

花間文字

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>